

簡單ながら二条にわたって述べられているのは注目される。

また時代が下り江戸時代になると都市化も始まり、結核が増加したというのは首肯できるが、当時の資料を引用するのに結核という言葉が混用して述べるのは疑問であり、資料に使われている通りの肺労とか労咳とかいう言葉を使って述べるべきと思われる。

この結核という言葉であるが、フランスのラエネックやイスのシェーンラインの仕事により、肺における結節形成の病理的な重要性が認識され、*tuberculosis* という病名が作られた。これにわが国で最初に結核という訳語をあてたのは幕末の緒方洪庵であろうということは評者が指摘した。

明治の初期から結核という言葉は定着したが、ヨーロッパでもこの病名が真に一つの感染症として認識されるのは一八八二年（明治一五年）のロベルト・コッホによる結核菌の発見を待たねばならなかった。これから近代の結核病学が始まる。

しかし病原菌が発見されてもこの病気の伝染と発病の過程はすぐにはわからず、診断、治療、予防の方法もなく、産業革命下のヨーロッパでも患者は増加の一途を辿った。コッホ創製のツベルクリンは最初治療薬として期待されたが、後に診断用薬となった。

わが国では官製の産業革命を企図し、まず線維産業が勃興したことによって女子労働者に結核が蔓延し、さらに軍国主義時代になると、重工業の興隆と兵役により若い男性に急速

に結核が広がったと著者は指摘している。

診断面からいえば、レントゲンがX線を発見したのは一八九五年（明治二八年）であるが、当初はあまり実用性がなく、わが国で間接撮影法が考案されて、徴兵検査や国民の健康診断に役立てられたのはやつと昭和一五年からであるという。

B C G がフランスからわが国にもたらされたのは大正一四年であるが、それによる予防接種が開始されたのは昭和一七年である。

治療薬として画期的なストレプトマイシンは一九四四年（昭和一九年）に発見された。

わが国では戦後の昭和二六年に「結核予防法」を制定し、それ以後結核対策が本格化するのであるが、それは著者が最も力を入れて書いている所であり、本書を読んで頂かねばならないだろう。

（中村 昭）

〔講談社、東京都文京区音羽二一―二二―二二一、電話〇三―五三九一―三六二五、平成十五年二月五日、B六判、二七九頁、二二〇〇円〕

山田 慶兒 著

『氣の自然像』

中国を中心として朝鮮半島、ベトナム、琉球、日本などに

広がった気思想を、自然科学の視点から評価すると、どのような可能性と限界をそこに見出だすことができるだろうか。本書は、こうした問題意識から、気思想の到達点を見すえ、その再構成作業を通して、現代における有効性までも批判的に検証しようとしている。長年、宇宙論や化学、医学などをとば口として、気思想の科学的構造を考究され、三浦梅園などの日本人学者による気思想の受容についても、深い思索を公にしておられる山田慶兒氏の、いわば総決算ともいえる大きな論文である。

気思想は、事物を物質としてではなく、気という視点からとらえる。するとどういうことになるか。事物は刻々と変化しつづける連続変化の流動においてとらえられる。休むことなく変化しつづけている事物は、個物としてとらえることができない。少なくともソクラテス以来の、事物をそれが完成して動かない(即ちもはや変化しない)現前ウツゼンの形でとらえ、そうした事物を個物としてとらえかえすような思考はない。

事物の連続変化を止め、切断しなければ、そこから個物は析出されない。「分けなければ」分らない道理である。にもかかわらず気思想は、事物を「分かる」とする。ではどのようにしてか。連続変化の時間的空間的位相をとらえ、それをパターンの形で認識することを通して、である。個物の形に切断しなくても、事物の変化は「分かる」のだ。

こうした方法の到達点として、易や運氣論、更には梅園

(そして昌益)の思想などがある。それらの「論理的」構成はいかなるものか、その限界はどこにあるか。基本法則から演繹するのではなく、複数のパターンの重ね合わせから、自然のありのままに接近しようとする方法論の特質が鋭くえぐられる。

論述の手順は厳正である。まず運氣論の成立年代が范行準の仮説に沿って検証され、「開封」の語のある注から北宋代挿入を、更に『元和紀用経』の考証からその五代末創始説を、それぞれ確認する。そしてそれが、とりわけ気象学説としてどのように理解・受容されていたか、中日にまたがって確認する。

その上で運氣の理論を再構成することを通して、その可能性と限界を明らかにする。ここでは中日の医家達の批判的言説が検証される。こうして運氣論の分析と批判を終えた上で、もう一度気思想そのものに立ち返り、その思考法とそこから導かれる自然像を、古代ギリシャの自然哲学・近代初期の物質理論との対比において浮かびあがらせる。そして気理論をどのようにすれば現代に蘇らせることができるかについて摸索する。

筆者の提案は二つある。ひとつは気理論を記号化・数理化することによって、複雑系を探る理論として再評価すること、いわば気概念を捨ててその実質を数学的に蘇らせることである。もうひとつは気理論が有効性を保持している中国医学と近代医学とが、対話型の共存を可能にするための、

概念の再編成、とりわけ新たな命名法の追求である。

こうした提案を生かすためには、再評価の方法論が問題となるだろう。抽象化・一般化が、近代の方法を基準として行われる時、他方の特質をこわすことなく、それを遂行しているかどうか問われねばならない。とりわけ無限の連続変化として事物をとらえる気の思考法を、「分ける言葉」である近代の記号体系によって抽象化したり再編成することの意味を、考え直すことが重要であるように評者には思われる。

(石田 秀美)

〔岩波書店、東京都千代田区一ツ橋二一五―一五、電話〇三―五二一〇―四〇〇〇、平成十四年十一月二十二日、四六判、二〇八頁、二七〇〇円〕

古西 義麿 著

『緒方洪庵と大坂の除痘館』

蘭方医療が漢方医療に対して現実的で決定的な勝利を民衆に印象づけたのは、天然痘による幼児の悲惨な死から牛痘接種が防御したことであった。官の手を借りず、民間の蘭方医達が協力し、大々的に牛痘接種をおこなったのは、緒方洪庵を中心とした大坂除痘館の面々であった。

長年大阪市立図書館館長などを歴任され、かたわら緒方郁藏、伊藤慎藏の研究、億川家(洪庵夫人八重の実家)解体時

の八重夫人の書状などの資料発掘、研究などに尽力された古西義麿氏が大坂除痘館の活動を主体としたこの本を出版された。氏はこの書名と同じ主題で、平成十三年春、母校の関西大学から文学博士の称号を授与された。

この本は本章七章と補章二章から成り立っている。第一章大坂の除痘館をめぐって、第二章 原老柳・松本俊平と大坂の除痘館、第三章 丹波の種痘医松本節斎とその一族、第四章 種痘をめぐる市井の人々、第五章 大坂における近代種痘制度の展開、第六章 近代における天然痘予防の歩み、第七章 「大坂除痘館」に加わらなかつた種痘医たち、補章一 緒方洪庵「膠柱方」(適塾の基準処方集)について、補章二 緒方洪庵夫人・八重の生涯と大坂の除痘館。

第一章においては、緒方洪庵と日野葛民(鼎哉の弟)が京都の日野鼎哉と福井の笠原良策から嘉永二年(一八四七)十一月、牛痘苗を分与され、大坂除痘館を設立、種痘活動を開始、幕末までの二十年間、洪庵以下延べ三十余名の医師が参加し、活躍した状況が述べられている。そしてさらにこの痘苗が、幕末までに、近畿、中国、四国の三か国一七二か所に分苗されたことを検証している。

第二章では、大坂除痘館で洪庵とともに活躍した原老柳(左一郎)と彼の娘婿松本俊平にスポットをあて、彼等の履歴、姻戚関係、門人録、除痘館における関与について述べられている。

第三章では、大坂除痘館から分苗された丹波氷上郡谷村の